

Title	カーン王国の拠点について : カラクムルとツイバンチエ
Sub Title	Where was the Capital of "Kaan" Polity in the Early Classic Maya Lowlands?
Author	佐藤, 孝裕(Sato, Takahiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	2009
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.78, No.3 (2009. 10) ,p.103(331)- 141(369)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20091000-0103">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20091000-0103</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# カーン王国の拠点について

——カラクムルとツイバンチエ——

佐藤 孝 裕

## 第一章 はじめに

近年のマヤの碑文解読の進展は目覚ましい。以前は、考古学資料に基づく推測しかできなかった古典期（二五〇—九〇〇／一〇〇〇年）のマヤの諸国家の歴史が、日付も含めて、具体的な人名や出来事で語られるようになってきた。古典期マヤ社会は、神殿ピラミッドが聳え立つ儀式センターで、神官たちが豊穡を願って祈りを捧げ、その周辺に住む農民たちは、日々農耕に従事する平和で牧歌的な社会ではなかった。ティカル Tikal、パレンケ Palenque、ヤシユチラン Yaxchilan、ロパン Copanなどの主要国を始めとし、数多くの国々が争いを繰返し、同盟の締結や破棄、また政略結婚を行ったりと、旧世界のどこでも見られるような世俗的な社会であったことが

明らかになった（図1）。こうして、もっぱら考古学の研究対象であった古代マヤ社会が、文字史料に基づく歴史的研究の対象にもなってきたのである。

ただ、古典期の文字史料は、石碑やリントネルなど石造モノメントに刻まれたものが大半を占めており、長年にわたる磨滅のため、解読が不可能になっているものが少なくない。そのため、文字史料が十分ではなく、一旦提唱されて広く流布した学説に、疑問が投げかけられることも珍しくない。近年、とりわけ議論の的になっているのが、カラクムル Calakmul 遺跡をめぐる問題である。古典期マヤ社会にあつて、ティカルと並ぶ「超大国」と考えられていたカラクムルを首都とする国家は、マヤ古典期の歴史を語る上できわめて重要である。古典期マヤ社会の諸国家は、しばしばこの両「超大国」を基軸とし

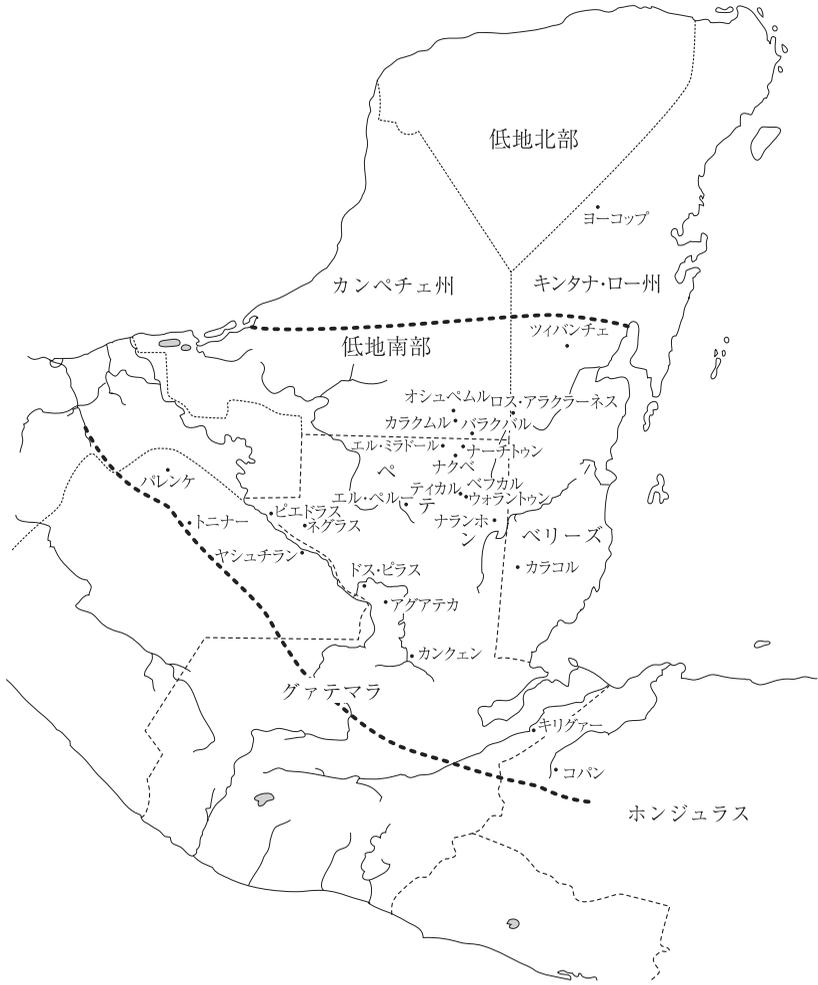


図1 マヤ地域図

て、互いに争い合っていたからである。ティカルとカラクムルは、それぞれ様々な国と同盟関係を構築して、相互に対立していた。その同盟関係は時には破綻し、かつてティカルに与っていた国がカラクムルと新たに提携するなど、まさに日本の戦国時代さながらの戦乱の様相を呈していた。

ところが、最近になって、果たしてこの国家の首都が、建国以来一貫して現在のカラクムル遺跡だったかどうかが疑わしくなってきた。更に言えば、これまでカラクムルとされていた国家は、実際には当初はツイバンチエ Dzibanche を首都としていて、それが後にカラクムルに移ったとする説が唱えられるようになった。この問題は、古典期マヤ社会の勢力図を塗り変えかねないほど重大である。本稿では、主としてカラクムル遺跡とツイバンチエ遺跡に残されたモニュメントの碑文史料を分析し、古典期前期(二五〇―六〇〇年)に両遺跡にどのような政体が存在していたのかを考察することによって、この問題を検証してみたい。

## 第二章 蛇頭紋章文字とカーン王朝

### 〈問題の所在〉

#### 第一節 カラクムル遺跡

カラクムル遺跡は、メキシコ、カンペチエ州の内陸部、グアテマラとの国境から三五kmほどのところに位置している。面積三〇km<sup>2</sup>以上にわたって、大小約六二五〇もの建築物が分布しているマヤ地域屈指の大遺跡である。だが、マヤ学者の間で注目を集めるようになったのはかなり新しく、ここ二〇年ほどのことである。もともと辺境の密林地帯にあるため、一九三一年に初めて探検家で植物学者のランデル Cyrus Longworth Lundell によって発見されるまで、長い間その存在は知られないままであった (Carasco Valgas et al. 1999: 47; Folan et al. 1995: 310)。その後も、マヤ文明史上の重要な遺跡としての認識は乏しく、ただ規模が大きく石碑の数が多い遺跡としてもっぱら知られていた。状況が変わったのは、一九七〇年代に入ってからであり、マーカス Joyce Marcus が紋章文字の研究から、カラクムルが古典期後期(六〇〇―一八〇〇年)のマヤ低地南部の地域的首都であった可能性を示唆したことによる (Marcus 1976)。そして、そ

のことが具体的な史実として浮かび上がってきたのは、一九八〇年代の後半以降である。カラコル Caracol 遺跡の発掘や碑文解読の進展の結果、それまで不明であった古典期前期末のティカルの衰退の原因に、カラクムルが大きくかわっていたことと、カラクムルがティカルに匹敵する強国だったことが、明らかにになってきたのである。事実、最盛期の都市の規模や人口の多さの点では、古典期マヤ社会最大の国家ティカルに優るとも劣らなかつた。また、低地南部マヤ社会に及ぼした政治・軍事的影響力の点でも、一時はティカルを凌いだとも推測されている。

人々がカラクムルに住み始めたのもティカルに劣らず古く、先古典期中期(前一〇〇〇―前四〇〇年)にまで遡る。先古典期後期(前四〇〇―後二五〇年)になると、低地南部マヤ地域における主要な国家の一つに成長した。高さ五五mにも達する建物Ⅱ(図4)が建設されたのもこの頃であり(Carrasco Valgas et al. 1999: 49)、『ナクベ Nakbe』エル・ミラドール El Mirador<sup>1</sup>、ティカルと並んで、当時の低地南部の四大主要都市の一つとして重きをなしていたとする説もある(Pincemin et al. 1998: 312)。しかし、その歴史が文字記録によって明らかにな

るのは古典期以降である。王の事績が文字史料の上から判明するようになるのは六世紀に入ってからであり、五四二年から九〇九年頃の間には、少なくとも一六人の王が存在したことがわかっている(Carrasco Valgas et al. 2005: 41)。六世紀の半ばには、カラクムルの勢力はティカルをも凌ぐようになり、絶頂期には王国の支配領域は一三〇〇km<sup>2</sup>、総人口は一七五万人にも及んだ<sup>(1)</sup>。マヤ地域で最も多い一七以上もの石碑が発見されているが、そのうち一〇〇以上がこの絶頂期に当たる六五二年から七五二年の間に建つられている(Braswell et al. 2004: 169; Polan et al. 1995: 327)。直接的な支配領域が広いだけでなく、紋章文字が生起する範囲もどの国家よりも広く、その強盛を物語っている。王国としての歴史は九世紀に終焉するが、人々の居住は後古典期後期(一一二〇―一五〇〇年)にまで及び、一四五〇年から一五五〇年の間にも儀礼活動が行われた痕跡が見つかっている。

## 第二節 ツイバンチエ遺跡

他方、ツイバンチエ遺跡はメキシコのキンタナ・ロー州にあり、カラクムル遺跡の北東一四〇kmほどのところに位置している。この遺跡は、命名のもととなったリン

テルが発見されたツイバンチエ・グループ<sup>(2)</sup>、トゥティル Tutil、ラマイ Lamay・グループ（あるいは中央コンプレックス）、キニチナー Kinichna の四つの区域から成っている (Nalda 2004: 13)。これらの地区に人々が居住し始めたのは、先古典期中期にまで遡る。その後、古典期後期後半まで間断なく人々は居住し続け、遺跡全体として見れば、後古典期後期まで人々は住み続けた (Nalda 2004: 23)。サクベ sacbe<sup>(3)</sup> でつながったこの四つの地区を合わせた総面積は二〇km<sup>2</sup>にも達し、最盛期には四万人もの人口を擁していたと推定されている (Nalda 2004: 18-19)。これは、ティカルの中心部の面積約一六km<sup>2</sup>を上回るものであり、ツイバンチエがいかに広大な規模を誇る都市であったかが想像できる<sup>(4)</sup>。しかも、この広大な版図は、古典期前半には既に達成されていたようである。中央コンプレックス、キニチナーのアクロポリス、「フクロウの建物」などの大規模建築は、ペテン Peten<sup>(5)</sup> 様式で建てられており、古典期前期に既に最大規模に達していた (Nalda 2004: 14-24-25)。従って、古典期前期前半に、ペテンの北方にはカラクムルとツイバンチエという二つの大都市が成立し、しかもいずれも建築物の観点から見ると、ペテン地方の影響を受けていたという

ことになる。

### 第三節 蛇頭紋章文字と紋章文字出現の意味

低地南部マヤ地域の古典期の遺跡の碑文中に、蛇の頭の形をした主字を有する紋章文字（以降、「蛇頭紋章文字」と呼ぶ）<sup>(図2)</sup> が頻出することは、以前から知られていた。一九七〇年代に入って、マールカスがそれをカラクムルのものと同定した。なお、現マヤ語で蛇を意味する言葉がカーン Kaan であるので (Barrera Vásquez 1995: 291; Velásquez García 2005: 1-2)、蛇頭紋章文字を持つ国家あるいは王朝の名称を、特定の遺跡とは切り離して考えるため、本稿では便宜的にカーンと呼ぶことにする。

それ以降も、カラクムル遺跡の考古学的調査の進展に伴い<sup>(6)</sup>、遺跡の建築物の巨大さや遺跡自体の規模の壮大さがより明らかになった。その結果、ティカルと覇権を争った古典期マヤ社会の超大国の首都として、カラクムルがいかに強大な勢力を持っていたかが判明し、古典期マヤ社会

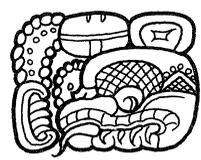


図2 蛇頭紋章文字 (Coe and Stone 2001: 70より)

の歴史を語る上で不可欠な存在になっていった。こうして、カラクムルはカーン王国の首都としての地位を揺るぎないものとしたかのように思われた。

ところが、一九九三～一九九四年にツイバンチェ遺跡でキンタナ・ロー南部考古学プロジェクトが行った調査の結果、カラクムルをカーン王国の首都とする説に疑問が投げかけられるようになった。この調査では、人物像や文字が刻まれた石のブロックが多数見つかったのだが、その文字テキストの中に蛇頭紋章文字と王名が、五世紀末にまで遡る日付と共に刻まれていたのである。同時期のカラクムル遺跡のモニュメントに蛇頭紋章文字が全く見られないのに対して、ここツイバンチェ遺跡の石のブロックに、それがカーン王朝の初期の王名と共に生起していることから、少なくとも古典前期のカーン王国の首都はツイバンチェではないかという仮説が提唱されるようになったのである。

ここで、紋章文字とその出現の意味について見てみたい。紋章文字とは、ベルリンの Heinrich Berlin によって発見された文字であり (Berlin 1966) 、古典期の碑文中で王やその家族の名前の直後に生起することが多く、大きく三つの部分から成っている (図3)。一つがクフル

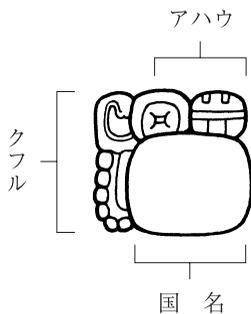


図3 紋章文字 (Martin and Grube 2008 : 17より)

kuhul (「神聖な」) という接字、もう一つが古典期の国家の首長 (王) に対して用いられるアハウ ahaw を表す接字であり、この二つは基本的に常に変わらない。これに対し、残る一つは紋章文字の中で最も大きな文字要素で、主字と呼ばれている。主字は国家ごとに異なっていることから、この主字こそが国家を表すものと考えられている。紋章文字が何を表すかについては様々な議論があったが、現在では王に伴う王朝の称号とみなされている。表1を見ればわかるように、紋章文字の大多数は、自国で刻まれた碑文に生起している。紋章文字の多くが王名に伴って生起することを考慮に入れると、王を顕彰する自国のモニュメントに生起する頻度が高くなるのは自明であろう。

いずれにしても、蛇頭紋章文字がいち早くツイバンチ

表1 古典期マヤの主要都市のモニュメントにおける紋章文字の生起数

遺跡名	同遺跡で生起した紋章文字の数	他の遺跡で生起した紋章文字の数
ティカル	44	7
ヤシュチラン	92	3
コパン	40	4
パレンケ	79	3
ナランホ	30	14
キリグアー	18	10
セイバル	10	1
ビエドラス・ネグラス	28	3
カラコル	3	2

(Marcus (1976: 14-15 Table 2) を基に作成。)<sup>7)</sup>

カーン王国の拠点について

エのモニュメントに出現していることから、古典期前期のカーン王国はツイバンチエに本拠地を置き、それが古典期後期にはカラクムルに移ったとの説が生じるようになったのである。

カーン王国の存在が碑文史料に基づいて確認されるのが、この紋章文字が出現して以降であるのは確かである。では、このことは何を意味するのであろうか。

マヤ低地南部に国家が成立したのは、先古典期(前一八〇〇―後二五〇年)に遡ると考えられている。この頃には既に、北東ペテン地方のエル・ミラドルやナクベなどで巨大な建造物が建築され、また神聖王権の存在を窺わせる画像が刻まれた石碑等のモニュメントが建立され、大規模な人口を擁する都市が誕生している (Denariest and Foias 1993; Braswell 2003; Marcus 2003)。しかしながら、この当時まだ文字テキストはこれらの都市にはほとんど見られず、もちろん紋章文字も現れていない。紋章文字の初見例は、ティカルの石碑29にある (Marcus 1976: 49 Table 5)。石碑の背面に、長期計算法による8.12.14.8.15 (一九二二年七月八日) の日付が刻まれているので、この石碑は三世紀末に建立されたと考えられる。ただ、この最古の紋章文字は、石碑に彫られた人物

の肖像の頭飾りの中に含まれているものである。碑文中に生じた最古の例は、石碑一の碑文に見られる (Michel 1989: 92)。表面の摩滅が激しいため、はっきりした建立年是不明だが、彫られた人物像の様式などから、九バクトゥン *baktun* の開始前後、すなわち五世紀中頃に建立されたのではないかと推測されている (Marcus 1976: 49 Table 5)。他の都市の例を見ると、ヤシユチランが五一四年 (9,400.0 石碑 27)、コパンが五六四年 (9,6,10.0 石碑 9)、ナランホ *Naranjo* が五九三年 (9,800.0 石碑 38) である。このように、ティカルの石碑 1 を嚆矢とし、六世紀までには古典期の主要な都市で紋章文字が使われ始めている。つまり、六世紀までには、マヤ低地南部の各地域に、紋章文字を有する王国が既に誕生していたということになる。この傾向は、時代が下るとともに増大し、とりわけ古典期後期には多くの国が紋章文字を持つことになる。このように、紋章文字は独立した王国の証しとも言えるものなのである。

#### 第四節 碑文史料から見たカーン王国の活動

ある国が紋章文字を使用し始めるといことが、独立国家としての存在を宣言し、誇示することと同義である

と考えられるとすると、カラクムルの古典期前期のモニユメントに紋章文字が見られないのは、かなり異常なことと言わざるをえない。もちろん、カラクムルが他国に従属しているような、重要性を持たない小規模な国家であったならば別である。しかし、カラクムルは古典期に入る頃には既に巨大な都市であった。しかも、ツイパンチエに蛇頭紋章文字が初めて生じた後も、カーン王国の活発な対外活動の痕跡は各地の碑文からも確かめられ、古典期前期のマヤ社会で重要な地位を占めていたことが判明しているのである。

たとえば、ヤシユチランの建物 12 のリントル 35 の碑文によると、カーン王カルトゥーン・ヒシユ *K'ahun Hix* の一臣下が、9,52,10,6 (五三七年一月一六日) に捕獲されている (Schele and Freidel 1990: 175; Martin and Grube 2008: 104-121)。また、ナランホの石碑 25 によると、同国王アフ・ウオサル・チャン・キニチ *Aj Wosal Chan Kinich* の 9,5,12,0,4 (五四六年五月五日) の即位の儀式を、カルトゥーン・ヒシユが主宰したことが知られる (Graham 1978: 2: 70; Carrasco Valgas 2000: 17; Martin and Grube 2008: 72)。

カルトゥーン・ヒシユの後を継いだカーン王「空の証

人 Sky Witness」も、五七二年にカラコルとの同盟を強化したことが、同地の石碑<sup>3</sup>に記されている (Carrasco Valgas 1998: 382, 2000: 17)。また、ロス・アラクラナス Los Alacranes の石碑<sup>1</sup>によると、五六一年に同地のサック・バーフ・ウイツィル Sak B'ah Witzil が、「空の証人」王の後援のもとで王位に即している (Grube 2004b: 35; Spraj 2007: 79)。「空の証人」王の名は、他のにもパレンケやエル・レスバロン El Resbalon の碑銘の階段や、ヨーコップ Yokop の「石B」でも言及されている (Martin 2000: 43; Grube 2004a: 120; Wren et al.: 92)。エル・レスバロンの碑銘の階段には、最も古いもので 7.0.16.14? (三三七七年)、最も新しいもので 9.7.6.4.18 (五八〇年二月一〇日) という日付が刻まれているのだが、「空の証人」以外にもう一人未知のカーン王の名が記されている。ヨーコップでは、「石B」以外にも「空の証人」王を指すと思われるテキストがあるのだが、それからは「空の証人」王がヨーコップの支配者であったことが考えられる。

そのツイバンチエでは、後述するように、ヤシュ・ヨバート Yax Yopaat とこの名の王が、9.7.0.0.0 (五七三年二月五日) にカトゥン Katun 完了を祝っている。

カーン王国の拠点について

彼に続く「渦巻き蛇 Scroll Serpent」王は、パレンケに対して二度にわたる遠征を行ったことで知られる。最初は 9.8.5.13.6 (五九九年四月二日)、続いて 9.8.17.15.11 (六一一年四月四日) にパレンケを攻撃し略奪したことが、宮殿の「家 House C」と碑銘の階段の東パネルにそれぞれ記されている (Martin and Grube 2008: 159-161; D. Stuart and G. Stuart 2008: 140-143)。彼の名はカラコルの石碑<sup>4</sup>にも生起している。ここでは、彼がカラコル王ヤハウ・テ・キニチ Yajaw Te' Kinich が行った何らかの行為を監督したことが知られる。

カラコルの別のモニュメント石碑<sup>3</sup>には、9.9.5.13.8 (六一九年一月九日) に、カラコル王カン Kan 二世が行った何らかの行為に関連して、「渦巻き蛇」王の後を継いだユクヌーム・ティ・チャン Yuknoom Ti' Chan の名が言及されている (Schele and Freidel 1990: 174)。

最後に、「ユクヌーム「頭」 Yuknoom 'Head」王の前の王であるタフーム・ウカブ・カーク Tajoom Uk'ab' Ka'uk が 9.9.9.0.5 (六二二年三月二八日) に即位したことが、カラコルの石碑<sup>22</sup>に記されている (Martin and Grube 2008: 92-106)。彼の名は、ナランホの碑銘の階段<sup>1</sup>の第六段のテキストの中でも言及されている。

このように、現在同定されている最古のカーン王であり、ツイバンチエのモニュメントに名前が生起しているユクヌーム・チェーン Yuknoom Ch'een 一世と、ユクヌーム「頭」王の間に、カルトゥーン・ヒシュ、「空の証人」、ヤシユ・ヨバート、「渦巻き蛇」、ユクヌーム・ティ・チャンと、判明している限りでも五人もの王が存在し、その名が蛇頭紋章文字と共に各地のモニュメントに刻まれている。このことは、カーン王国という独立国家が存在し、他国に大きな影響力を及ぼしていたことを示している。それにもかかわらず、カラクムル自体の同時期のモニュメントには、蛇頭紋章文字は存在しないのである。しかも、外地でカーン王の名が言及される際には、カラクムルの地名を指すと思われる文字を一切伴っていない。それに対し、ツイバンチエには、後述するように、明らかにカーン王の戦勝記念モニュメントが残っている。これらのことを考え併せると、カラクムルが国家成立時からカーン王国の首都だったか疑わしく思える。

次章以降では、カラクムルとツイバンチエの古典前期の状況を、主としてモニュメントに刻まれた碑文を分析することで、この問題について検討してみたい。

## 第三章 古典期前期のカラクムル

### 第一節 古典期前期のモニュメント

先古典期に既に巨大な建築物を建設するまでに成長したカラクムルは、古典期前期に入ると更に繁栄する。一例を挙げると、土器が最大規模に生産されたのはこの時期であり、それらは建物Ⅳ-Bと建物Ⅲで出土している (Carrasco Valgas 1998: 381)。ちなみに、後者はカラクムル唯一のペテン様式の宮殿で、通時的に見ても改修が加えられていないことから、特別に重要視されていたと考えられる。カラクムルとペテン地方との関係は、先古典期後期にまで遡り得る。当時、規模の点では古典期の都市を凌駕するほどの建築物を擁していたエル・ミラドールとサクベでつながっていたことや (Folan et al. 1995: 313)、カラクムル最大の建築物である建物Ⅱ (図4) が、規模の点でも形態の点でもエル・ミラドール最大の建築コンプレックスであるエル・ティグレ El Tigre (図5) に酷似していることから、この両者の間に緊密な関係があったと推測できるからである。

ところが、石碑等の石造モニュメントに目を転じると、都市の巨大な規模とは対照的に、不自然なほど少ない。

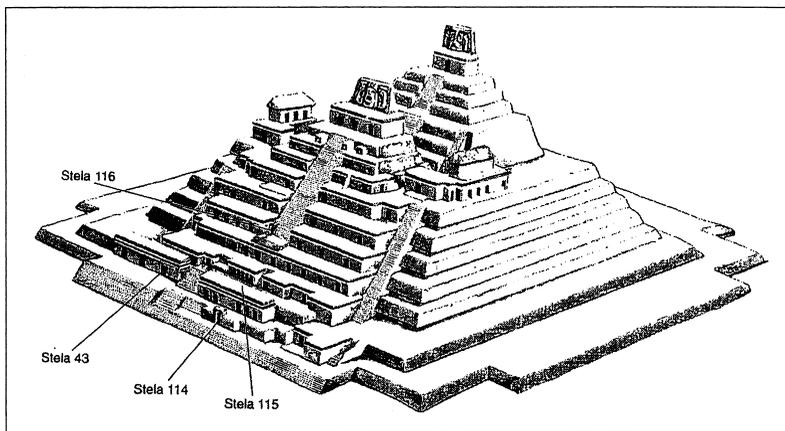


図4 建物Ⅱ (カラクムル) (Pincemin et al. 1998:313 Figure 3. より)

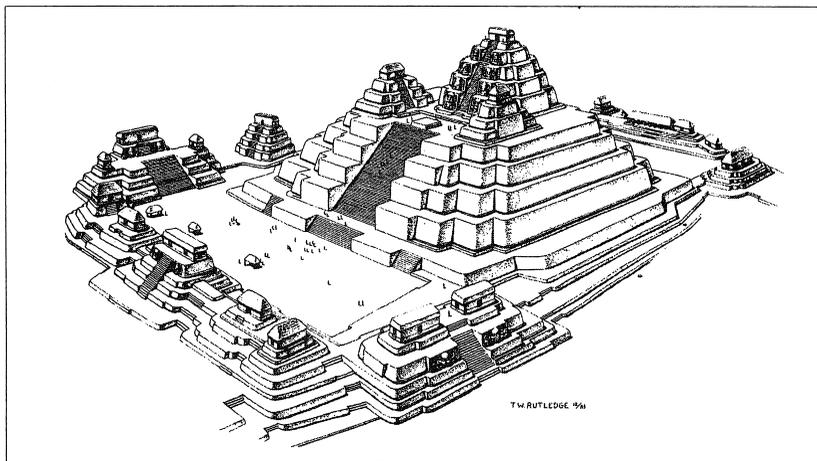


図5 エル・ティグレ (エル・ミラドール) (Sharer 2006:255 Fig. 6. 19 より)

この点について、次に述べていきたい。

先述したように、古典期前期には巨大都市としての体裁を整えていたカラクムルであるが、どのような勢力が支配していたかを示す文字史料にきわめて乏しい。とりわけ、遺跡全体で少なくとも一七基の石碑が見つかっているにもかかわらず、古典期前期のものとなると、石碑14と石碑43の僅かに二基しかない。ティカルはもちろんのことだが、カラクムルの周辺にはバラクバル Balakbal、ベフカル Bejucal、ウォラントゥン Uolantun、エル・ペルー El Peru のように、カラクムルより規模は小さいにもかかわらず、四三五年以前にモニュメントを建立している都市がある。このことを考えると、カラクムルで石碑建立が遅れるのは不可解である。いずれにしても、古典期マヤ社会において、石碑は肖像や文字を刻むことによって、王の業績を顕示するために建立されるのが一般的である。そのため、石碑が乏しいことが、古典期前期のカラクムルの支配勢力を理解することを困難にしている。

現在知られている限り、カラクムルで最古の石造モニュメントは石碑14である。建物Ⅱの基部の壁龕の前に設置されているが、もともと建てられた場所は別であり、

そこから現在地まで持って来られたものと考えられている。正面に豪華に着飾った王と思われる横向きの人物の肖像が彫られ、両側面と背面には長い文字テキストが刻まれている(図6)。8.19.15.12.13(四三一年九月一日)という日付で始まる裏面のテキストには、ある王が四一年に即位したことで、その人物が即位の一カトゥン完了を祝っていることが記されていると考えられている(Grube 2004a: 121; Martin 2005: 9)。しかし、ここには蛇頭紋章文字は見当たらない。その代わり、その人物を“ch'ik-NAHB AJAW” (“チーク・ナーブ”の আহウ)と表現している。これはチーク・ナーブ Ch'ik Nahb という地名を表す文字の最初の生起例である。重要なのは、この人物がテキストの主役と考えられることから、この石碑が「チーク・ナーブの আহウ」<sup>(10)</sup>のために建てられたということである。つまり、カラクムルは蛇頭紋章文字が用いられるようになる前は、チーク・ナーブと呼ばれていたことになるのである。

石碑14について、一つ付言したいことがある。それは、表面に豪華に着飾った人物の肖像、残る三面に文字テキストが刻まれているという点だが、ティカルの石碑31(図7)と共通しているという点とである(Princemin et al.

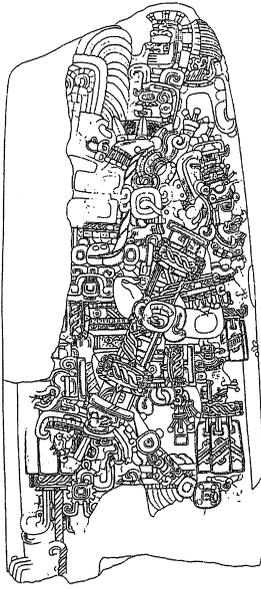


図8 石碑40 (ティカル)  
(Harrison 1999: 93 53 より)

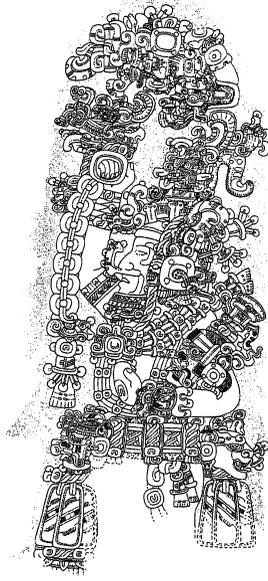


図7 石碑31 (ティカル)  
(Harrison 1999: 88 51 より)



図6 石碑114 (カラクムル)  
(Pincemin et al. 1998: 315 Figure  
6. より)

1998: 311-315)。しかも、石碑31は9.0.10.0.0 (四四五年一〇月一七日) 頃建立されているので、石碑114とほとんど同時期である。表面に彫られた肖像は、ティカル王シヤフ・チャン・カウィール Siyaj Chan Kawil二世である。彼は8.18.15.11.0 (四一一年一月二六日) に即位し、9.1.0.8.0 (四五六年二月三日) に死去しているので、石碑114の肖像の人物とまさに同時代人である。ただ、構図の点、とりわけ右手に笏を握っているという点では、むしろ同じティカルの石碑40 (図8) に似ている。この石碑も9.1.13.0.0 (四六八年一月二〇日) に建立されているので、石碑114とほぼ同時代だと言える。いずれにしても、この時期のカラクムルは、ティカルと同様の石碑彫刻伝統を共有していたことが窺われる。

石碑43も建物IIで発見された。石碑114と同様正面には頭飾りを始めとする多様な装飾品に覆われた横向きの人物が彫られている (図9)。足下にくつぶせになった捕虜が彫られているが、この姿も含め、全体の構図は石碑114の肖像より

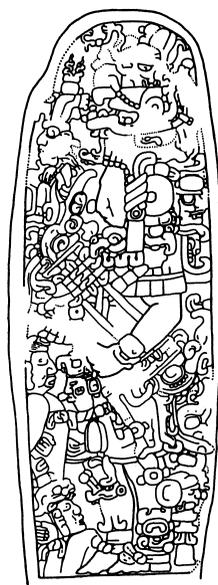


図9 石碑43 (カラクムル)  
(Pincemin et al. 1998 : 318  
Figure 9. より)



図10 ライデン坂  
(Pincemin et al. 1998 : 318 Fig-  
ure 10. より)

も、ライデン板 Leyden Plate に刻まれた人物 (図10) にきわめてよく似ている。ライデン板は、もともとティカルに由来すると推測されている斧のような形を呈したヒスイ製の小板で、裏面には814.3.1.12 (三二〇年九月一七日) という日付が刻まれている。この二つの肖像の酷似も、カラクムルがティカル、少なくともペテン地方

と何らかのかかわりがあったことを物語っているのかも知れない。

両側面には文字テキストが刻まれているのだが、940.0.0 (五一四年一月一六日) という日付で始まっていることから (Grube 2004a: 121)、カトゥン完了のモニユメントとして建立されたと考えられる。しかし、ここにも蛇頭紋章文字は刻まれていない。その代わりに、クフル・チャタン・ウイニク *K'uhul ch'atan winik* 「チャタン Ch'atan の聖なる人」という称号が生起している。従って、表面の肖像の人物は「チャタンの聖なる人」という称号を有していたのであろう。

## 第二節 チャタン

このように、古典期前期のモニユメントのテキストの観点からは、カラクムルにカーン王朝の痕跡は見られないと言わざるを得ない。その代わり、碑文に刻まれているのがチーク・ナーブとチャタンという、地名を表すと見られる文字である。この二つの文字から、この当時のカラクムルの状況について考えてみたい。

先ずチャタンであるが、この文字はクフル・チャタン・ウイニクという形で、コデックス様式の土器に描かれたプライマリー・スタンダード・シークエンス Primary Standard Sequence<sup>(11)</sup>の後にしばしば生起している (Grube 2004a: 119-124; Martin 2005: 6; Mathews et al. 2005: 671; Martin and Grube 2008: 102)。これらの土器は、エル・ミラドール盆地周辺やナクベ周辺で、古典期後期に生産された。従って、チャタンはエル・ミラドール盆地、あるいはナクベ周辺を指す地名と考えられる。カラクムルの石碑43の碑文の人物が「チャタンの聖なる人」という称号を伴っていることは、当時のカラクムルがカーン王朝の首都ではなく、チャタンという何らかの社会組織に属していることを誇示しているのかも知れない。

この文字は、エル・ミラドールの北東ほど近くに位置するアルタル・デ・ロス・レイエス Altar de los Reyes 遺跡で、二〇〇二年に発見された祭壇3のテキストにも生起している。祭壇3は円形のモニュメントで、側面を取り囲むように横一列に、一四ないし一五の文字が刻まれている (Grube 2003)。うち判読できる文字が一一あり、その中の一つがチャタン・ウイニクなのである。残る文字のうち九が、ティカル、カーンやパレンケの紋章

文字である。この遺跡で発見されたモニュメントで年代が確認できるのは石碑1のみで、ここには 918.10.00 (八〇〇年八月一九日) という日付が刻まれている。このことから、祭壇3も同時期に製作されたモニュメントと推測され、ここに記されたテキストは古典期後期の政治状況を表していると考えられる。ここでチャタン・ウイニクとカーン王国の紋章文字が別々に刻まれていることから、この両者が別の社会組織を表していることがわかる。チャタン・ウイニクを表す文字には、紋章文字に前接辞として生起するクフルの文字が欠如していることから、チャタン・ウイニクは、紋章文字とは別の意味合いの文字であることが考えられる。これらの紋章文字が、パレンケを除くと、エル・ミラドール盆地を中心とする地域のものであることから推して、グループも指摘するように (Grube 2003)、チャタン・ウイニクとはこれらの紋章文字を持つ国家の総称的意味合いを持つ社会組織を表すものではなからうか。そう考えると、もっぱらこの地域で製作されたコデックス様式の土器に、クフル・チャタン・ウイニクの文字が頻出するのも理解できる。

しかも、祭壇3が製作されたであろう古典期後期はも

とより、六世紀前半に建立されたと考えられるカラクムルの石碑43にもクフル・チャタン・ウイニクの文字が生起していることから、後者の時点よりも更に時代を遡る歴史を有した称号であると言える。コデックス様式の土器には、しばしば神話的過去のこと为主题として描かれる。そして、チャタン・ウイニクで表される神話的過去とは、巨大な廃墟を残したエル・ミラドルやナクベが栄えた先古典期のことではなからうか。このことから、チャタン・ウイニクとは、先古典期にこの地域を支配していた社会組織の称号を表している可能性はあると考えられる。

このことは、俗に「王朝土器 *Dynastic Vase*」として知られる土器の存在からも言える。「王朝土器」は、コデックス様式の土器のうち、カーン王朝の王名が記された一一ほどの土器のことである。最も長いテキストが記されたものには、「空を持ち上げる者 *Skvraiser*」王に始まる一九人の王の名前や即位が記されているため、カーン王朝の起源について論じる際にしばしば言及される。ただし、この記録にはそのまま史料として用いるには危険な、次のような問題点がある。日付がカレンダー・ラウンドでしか記されておらず、西暦への換算が困難なこ

と、石造モノユメントの碑文で知られていない王名が散見すること、逆に初期の既知の王名が欠落していること、治世の順序が実在したとされる既知のカーン王の順番と異なること、などである。

このような問題点を踏まえて、マーティンとグルーベは、「王朝土器」に記された諸王はカーン王朝の先祖やあるいは伝説上の人物ではないかと推測している。少なくとも、実際の歴史的事実が書かれた史料として、そのまま受け入れるのは難しいということである。では、この「王朝土器」はどういう性格を有する資料なのであるうか。

それを考えるのに際して、参考になる点がいくつかある。一つは、土器に記されたカレンダー・ラウンドの日付である。シェアラが言うように、それらが前三九六年から後一世紀に換算できるとすると (Starter 2006: 259-261)、四〇〇〜五〇〇年の間に一九人の王が存在していたことになる。一人平均約二〇〜二五年統治していたことになり、現在の王の平均治世として、必ずしも不自然な数字ではない。また、前三九六年から後一世紀という時期は、ナクベやエル・ミラドルが繁栄していた時期と重なる。しかも、先述したように、これらの土器

はカラクムルでなく、エル・ミラドール盆地、とりわけナクベ周辺で製作されたことが判明している。<sup>(12)</sup> いずれにしても、実際にこれらの土器が製作された古典期後期より、はるか以前の王であるということになる。更に、後述べるように、蛇頭紋章文字の最古の生起例がツイバンチエの碑銘の階段に見られるのだが、刻まれた碑文の中の最も古い日付でも五世紀後半のものであり、「王朝土器」に記された最後の王の治世より五〇〇年近く前のことになる。従って、「王朝土器」に描かれた王名が、実在したカーン王朝の初期の諸王のものであるとは考え難い。紋章文字の存在が確認されていない現状では、先古典期後期のこの時期に、蛇頭紋章文字を持つ国家が存在していたとの確証がないからである。これらのことを勘案すると、「王朝土器」に記された王名が、仮に実在のもの、あるいは少なくとも後世の人々からそう信じられていたものであったとすれば、ナクベ、あるいはエル・ミラドールを支配していた王朝のものであった可能性もある。これら「王朝土器」に記された諸王とは系譜上直接的にはつながらないカーン王朝が、かつて存在した権威ある国家を正当に継承するものであるように装って顕示し、自らの権威を高めようとしているということ

である。

もともとエル・ミラドール盆地は、先古典期マヤ地域の中では先進地域であり、三つ組神殿構成 Utiadic temple form<sup>(13)</sup>、持ち送り式アーチが用いられた神殿や墳墓、球技場、Eグループ建築複合などがいち早く出現した(Hansen 1998; Sharer 2006: 261)。いわば、古典期文化の揺籃の地であり、だからこそ、他に先駆けてこの地に勃興したエル・ミラドールやナクベのような、巨大都市を擁する国家の後継者たることを喧伝し、自らの権威づけとして利用しようとしたことは十分考えられる。とりわけエル・ミラドールとは、実際にサクベによって結ばれていたとすれば、なおさらのことである。

### 第三節 チーク・ナーブ

次に、チーク・ナーブについて考えてみたい。マーテインとグループは、当初、都市としてのカラクムルはウシユテトゥーン Uxte'tuun (オシユテトゥーン Oxte'tuun、あるいはフシユテトゥーン Huxte'tuun とも) と呼ばれ、これを含むより広い領域がチーク・ナーブと呼ばれていたとしていたが、その後この意見を翻している (Martin and Grube 2000: 104; Martin and Grube 2008: 104)。事

実、いくつかの史料から判断して、むしろその逆だと解釈する方が妥当だと考えられる。

たとえば、カラクムルの石碑9の碑文には、ユクヌーム・イチヤーク・カーク Yuknoom Yich'aak K'ahk<sup>14</sup>が、チーク・ナーブで即位したとの記述がある (Martin 2005: 5)。この場合、チーク・ナーブは即位地と考えられるので、広い領域の名というより都市名と考えた方がよいであろう。同じ例は、9.13.0.0 (六九二年三月一日) に建立されたドス・ピラス Dos Pilas の石碑13の碑文にも見られる。ここには、カーンの神聖王ユクヌーム・イチヤーク・カークが、チーク・ナーブで即位したと記されており (Schele and Freidel 1990: 182 Fig. 5: 10)、カーンとチーク・ナーブが別のものを表していることがわかる。三つ目の例として、ナランホの碑銘の階段一の第六段のテキストが挙げられる。これは、カラコル王カン二世が 9.10.10.0.0 (六四二年二月四日) のホトゥン hotun 完了を祝って建立したものだ<sup>15</sup>が、ここには、

u-kabij yuk [noom] [?] kanal ajaw ta huxte'iuun aj  
chik nahb

すなわち、「チーク・ナーブ出身のウシユテトゥーンの

カーン王たるユクヌーム「頭」が、それを命じた」との記述がある (Tokovinine 2007: 19-20)。ちなみに、「このテキストは、カーン王国の所在を追究する上で重要な文字であるチーク・ナーブ、ウシユテトゥーン、そして蛇頭紋章文字の三つ全てが刻まれており、これら三者が何を意味するか考察する上できわめて重要である。更に、「カンクエン Cancuen の略奪されたパネル」にも興味深いテキストが記されている。先ず第二行には

u tzakaj huk (kin) ho' wintik'iy juun (?) haab'iy i  
uut lajchan ha' chan kasew och b'itaj kinich K'ap?  
Neel? Ahk B'alam Otoot utiy Chik Naab'

すなわち、「キニチ・カップ(?)・ネール(?)・アーク・バルーン・オトート Kinich K'ap? Neel? Ahk B'alam Otoot がチーク・ナーブで死んだ」と記されている (Guenther: 3)。また、第三行には、

Yuknoom Ch'een Ux Te' Tuun Kal (oom) te'  
「ウシユテトゥーンのカロームテ、ユクヌーム・チェーン」と刻まれているのである (Guenther: 5-6)。

これらの例から判断して、現在のカラクムル遺跡がある場所がチーク・ナーブであり、この地を中心とする領域の名称がウシユテトゥーンだったと考えるのが妥当で

あろう。<sup>(17)</sup>そしてカーンとは、当時チーク・ナーブを首都としてこの領域を支配していた王朝の名称だと考えるのが、ナランホの碑銘の階段一の第六段のテキストの最も妥当な解釈であろう。

最後に、もう一つ重要なことがある。それは、カーン王の本拠地がチーク・ナーブ、すなわち現在のカラクムルであることを示す最古の史料が、このナランホの碑銘の階段一の第六段のテキストであるということである。すなわち、カーン王とカラクムルが結びつくのは、ようやく七世紀に入ってからのことなのである。つまり、古典期前期に、カーン王国とカラクムルを結びつける史料は、一切存在しないのである。

#### 第四章 古典期前期のツイバンチェ

##### 第一節 古典期前期のツイバンチェのモニュメント

###### ―「捕虜の建物」―

第二章第三節で述べた石のブロックは、遺跡を構成する四地区の中でも最大のツイバンチェ・グループで発見された。この地区の「捕虜の建物」と命名された建物の前面に取り付けられた階段に、捕虜と思われる人物像と文字が刻まれた石のブロックが多数あったのである。

「捕虜の建物」は、ピラミッド型を呈した三段から成る基壇である。建造が始まったのは古典期前期のことであり、この時期の建築には典型的なペテン様式の建築技法が見られる。<sup>(18)</sup>ただし、この階段を構成する石のブロックは、コパンやドス・ピラスの碑銘の階段のように、築造の当初から碑文を建築要素に組み込むように意図的に建造されたものとは、性格が大きく異なっている。それらとは対照的に、「捕虜の建物」の階段の石のブロック群は、相互に何の脈絡もなく、雑然と並べられているのである。このことから、これらの石はどこか他の場所で作られた建造物から持ち去られ、刻まれた内容を顧慮することなく、「捕虜の建物」の前に組み立てられたものと考えられている (Nalda 2004 : 21 ; Velásquez García 2004 : 79)。「捕虜の建物」は、古典期後期と古典期終末期 (八〇〇―九〇〇/一〇〇〇年) に小規模な改築が施されているのだが、後者の第四期建築相にこの五段の階段が取り付けられた (Nalda 2004 : 20)。そのうち一部に、ここで問題となっている碑文や肖像が刻まれた石のブロックが用いられているのである。

先にも述べたように、これらの石のブロックは、本来の意図とは無関係に再利用されたものである。これらが

散在していることから、単なる建築資材としてしか認識されていないことは明らかである。具体的に言うると、モニユメント4、モニユメント16、モニユメント17とモニユメント18は階段の下で見つかっているし、モニユメント21は、「捕虜の建物」と同様ガン(Gann)広場に面している建物Ⅺに、またモニユメント3は建物Ⅻ、モニユメント2は「鶉の建物」にあった。

これらの石のブロックは、本来の用途の観点から見て、二つに大別できる。一つは、輪郭のわずかな空間を残して、文字や捕虜の肖像が刻まれているものである。もう一つは、彫刻が施されたのは上半分のみで、下半分は未加工のまま残されているものである。この二つのグループのブロックは、大きさも異なっている。このうち、本来階段の石段として用いられていたのは前者のみで、後者は建物の軒蛇腹として使用されていたのではないかと推測されている。また、彫られた内容の主題も異なっている。前者には、体を縛られた捕虜と思われる一人の人物が、大きく彫られているだけなのに対し、後者のうちモニユメント16とモニユメント19には、エリートと思われる複数の人物が、小さく彫られている。なお、後者のうちモニユメント2とモニユメント4には、文字しか刻

まれていない。製作時期にも違いがあり、刻まれた日付から、前者のほうが後者より早く製作されたと考えられる。そこで本稿では、この両者について別々に検討してみたい。両者を区別するために、彫られた光景の相違に基づき、前者を「捕虜グループ」、後者を「エリートグループ」と仮称する。

## 第二節 「捕虜グループ」のモニユメントの碑文の解釈

このグループに含まれるモニユメントは、3、5、6、7、8、9、10、11、12、13、14、15、17、18、20、21、22という数字が付けられているものである。

これらのモニユメントは、細長い長方形の石のブロックで、いずれも左端あるいは右端に文字列、その文字列に向かって、手首を紐で縛られた捕虜が彫られている。捕虜の姿勢は様々で、あぐらを組んだまま前のめりになった者、左足の膝をわずかに曲げて前に伸ばし、右足がかがめている者、うつ伏せになっている者などがある(図11)。マヤ地域の多くの遺跡の石碑やリントルには、戦争で捕獲された捕虜の姿がしばしば描かれている。ただ、直立した姿勢の王の足の下に踏みつけられた状態や、王に捕縛される情景、あるいはまた捕縛された姿で王の



図11 モニュメント3 (Nalda 2004 : 32 より)

御前に引っ立てられたりと、王の権威や権力を誇示する意図で表現されるのが一般的である。いずれにしても、明らかに捕縛された囚人が描かれていることから、これらのモニュメントも戦勝記念、あるいは戦勝を誇示するために製作された可能性が高い。

このことは、モニュメントに刻まれた碑文からも裏付けられる。たとえば、このグループのモニュメントのうち、約半数の九つにオチ och とチェン ch'en という文字が生起している。この両方の文字が刻まれているモニュメントの碑文を列挙すると、次のようである (Velásquez García 2004 : 85-101)。

モニュメント3

b'olon ajaw och ch'en ...to'in

モニュメント5

b'uluk ok och uchen Xook Ucha'..., yatej Yu-  
-[h]kno'm Ch'en, kuh[ul] Kan ajaw

モニュメント6

...waxaklajin Kanasity och ch'en ...Ch'en ...l...

Ajaw

モニュメント8b

och ch'en ...l, ucha'ial yate'aj kuh[ul] Kan[al]?

ajaw

チニユメント 10b

[och] ch'ien Mo' Nal : uwaxaktal yate'aj

チニユメント 11

wak tzi'kin waxaklajun paax och uch'ien Ayia...n...

n...nal, uwaklajun'tal yate'aj Yu[h]kno'm Ch'ien

チニユメント 12

...suutz' [och u]ch'ien "GIII" ja?, yate' kuh [ul] Kan

ajaw

チニユメント 15

lajun ajaw waxak tzik [i]n och ch'ien...n kan [a]l,

yate' kuh [ul] Kan ajaw

チニユメント 18

...jun un[i]w och uch'ien Yax Ka[h]k Jol[o]m ;

uhot'al yate'aj

さして長くもない各テキストに、この二文字がこれだけ頻出していることから、これらが碑文の主題に密接にかかわっていると考えられる。オチは「入る」という意味であり、またチェンは「穴、井戸」の意味なので (Barrera Vasquez 1995 : 131 ; Martín 2004 : 106)、『オチ・チェン』“och ch'ien”という句を字義通り解釈すると、

「穴、あるいは井戸に入る」という意味になる。しかし、マーティンによると、戦争を主題とする文脈でチェンという文字が用いられる場合は、単なる穴や井戸のことを指しているのではなく、「町、領土」の意であるカブ・チェン “kab ch'ien” 「大地―穴」を示唆している。従って、「オチ・チェン」とは、戦争に勝利した戦士が敗者の町に入る、あるいは敵の町や都市を攻撃することを意味する (Velasquez Garcia 2004 : 83-85 ; Martín 2004 : 105-109)。

同様の文脈でチェンが生起する例は、他の遺跡でも見られる。たとえば、先にも引用したナランホの碑銘の階段一の第六段には、次のように記されている。

[ta]huk ak'bal waxaklajun [e'] muwaan [ʔ] sa'aał u-  
ch'en k'uxaj sak chuwen u-kabij yuk [noom] [ʔ]  
kanal ajaw ta huxte'iuun aj ch'ik nahb

ここには、チーク・ナープ出身でウシユテトゥーンのカーン王(アハウ)ユクヌーム「頭」によって、サール Sa'aał すなわちナランホが陥落したと記されているのだが、ここでも都市としてのナランホのことをチェンとして言及している (Tokovinine 2007 : 16-19)。また、『同じナランホの石碑 21』には、『ub'aañ ti och ch'een yootz'』との記述

の後に、ナランホ王カーク・テイリウ・チャン・チャー  
ク *K'ank Tiliw Chan Chaak* の名が生起しており、ヨ  
ツ *Yoots* という名の都市が、カーク・テイリウ・チャ  
ン・チャークの侵略を被ったことがわかる。パレンケの  
神殿17にも、トニナー *Tonina* の王の敗北を記した碑文  
に、*'och (i) uch'en'* という文字が用いられている。

これらのことから、「捕虜の建物」の階段に用いられ  
た、「オチ・チェン」という句が生起するテキストが刻  
まれたブロックは、敵国へ攻め入ったことを誇らしげに  
宣言するものだと考えられる。つまり、これらのモニユ  
メントは、建立者でありかつ描かれた捕虜の国に対する  
戦勝者が、敵国への勝利を文字と絵で誇示するために製  
作されたと考えられるのである。<sup>(22)</sup>

では、この戦争はどの国とどの国の間で行われ、どち  
らが勝ったのであろうか。それを示唆するテキストが、  
いくつかのモニユメントに見られる。たとえば、モニユ  
メント5を見ると、ここには「11オックOkに、カーン  
の神聖王ユクヌームの捕虜、シヨーク・ウチャの穴に入  
った」と記されている。<sup>(23)</sup> つまり、カーン王国の王ユクヌ  
ーム・チェーン一世が戦勝者だというのである。ユクヌ  
ーム・チェーンの名は、他のモニユメントにも生起して

いる。モニユメント11には、「6メン men 18パシユ pak  
(五〇五年二月一五日あるいは五一八年二月二日)に、  
ユクヌーム・チェーンの十六番目の捕虜「アフヤ *A'ya*  
」の穴に入った」とある。カーン王の称号こそ伴って  
いないが、これはユクヌーム・チェーンの名が言及され  
た最古の例である。磨滅が激しく、判読がほとんど困難  
なモニユメント8aにも、ユクヌーム・チェーンの名が称  
号を伴わずに生起しているようである。<sup>(24)</sup>

この例とは逆に、王名の代わりに称号のみが生起して  
いるものもある。モニユメント8bには、「カーンの神聖  
王の二番目の捕虜が、穴に入った」と記されている。  
モニユメント12には、「カーンの神聖王の捕虜「GIIIハ  
[a]」の穴に入った」と記されている。モニユメント13  
には、

ho' chikchan hux yaxkin chu [h] kaj... Ba[h] lam,  
yate'aj k'uh [ul] Kan [a]l ajaw

すなわち、「5チクチャン *chikchan* 3ヤシユキン  
*yaxkin* (四九〇年八月八日)に、カーンの神聖王の捕虜  
「ジャガー」が捕らえられた」と記されている。<sup>(25)</sup> 最後  
に、モニユメント15にも10アハウ *ajaw* 8シユル *xul* (四  
七一年七月二九日あるいは四八四年七月二五日)の日付

と共に、カーンの神聖王という文字が刻まれている。これは蛇頭紋章文字の最古の生起例である。

上記の例だけでなく、このグループのブロックは全て、描かれた場面の主題や構図、捕虜の様式などが共通しているもので、同時期に同一の建築物に用いるために製作されたものと考えられる。従って、「カーンの神聖王」としてのみ記されている者も、ユクヌーム・チェーン一世を指すと考えてよいであろう。つまり、現在判明している限り、ユクヌーム・チェーン一世が最初のカーン王、すなわち蛇頭紋章文字を伴う王であり、このブロック群は多年にわたる彼の征服活動の記念碑であると考えられる。<sup>(27)</sup>

### 第三節 「エリートグループ」の碑文の解釈

このグループに含まれるモニユメントは、2、4、16、19という数字が付されているものである。先にも述べたように、これらのブロックは上半分のみに文字、あるいは複数の人物が表された光景と文字群が刻まれたモニユメントである。このうち、モニユメント2aとモニユメント4には文字のみが刻まれている。モニユメント2aには、

*huk ajaw hux uniw utzutz [u'w]huk winakhaab...*

*ʔi: [v]*

すなわち、「7アハウ3カンキン *ʔan kin* に、彼は7カトゥンを終えた」と記されており、王が *ʔonon* のカトゥン完了を祝って刻ませたことが察せられる。このモニユメントの日付（五七三年二月五日）からも、このブロックが「捕虜グループ」のブロック群より新しいことは明らかである。このことは、モニユメント4でも確認できる。このモニユメントには、

*...v cha' kan cha' mak u... :ajaw*

すなわち、「2カン *kan* 2マック *mak*（五五〇年二月二〇日あるいは六〇二年一月七日）に、王は」と文の不完全な断片のみ残存しているが、刻まれた日付が「捕虜グループ」より新しいことは同様である。

残る二つのブロックには、文字群と光景の両方が彫られている。まず、モニユメント16を見てみたい。ここには、左端に大きな二行二列の文字群、その右隣に三人の人物が、小さく右を向いて立っている光景が描かれている（図12）。かなり磨滅しているとはいえ、三人とも頭飾りをかぶり、豪華に着飾っている様が見て取れるので、エリート階級に属す人間であろう。ざんばら髪でほぼ裸体の上、縛られた姿で描かれた「捕虜グループ」の捕虜

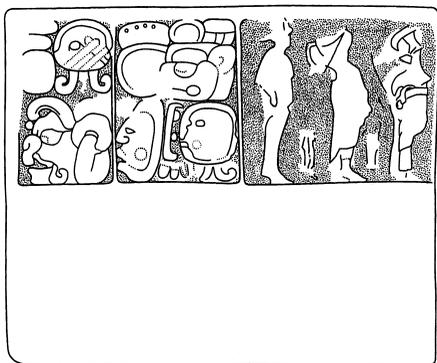


図12 モニュメント16 (Nalda 2004: 49 より)

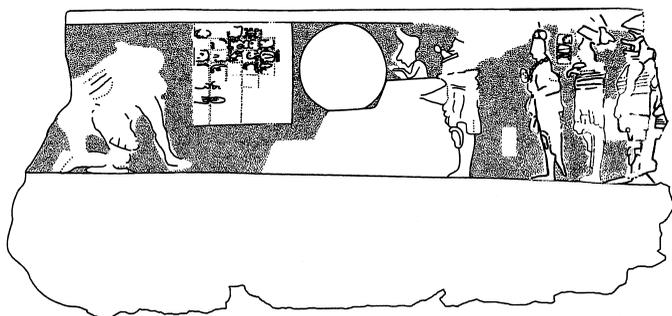


図13 モニュメント19 (Nalda 2004: 52 より)

たちとは、扱われ方が大きく異なる。「捕虜グループ」と「エリートグループ」のプロックが、製作時期や元々の用途だけでなく、製作意図も全く異なることが明瞭に

見て取れる。左端のテキストには、  
...y.Yo'at Kuh[ul] Kan ajaw, ajaw? u...jity  
ヌーム・チェーンとは別の名である(ヤシユ)?・ヨアート(ヨバート)という名前が生起している。モニュメント19の主題は明らかに球技である(図13)。左端に球技者、そのすぐ右には正方形に近い囲いの中に、ほとんど判読が不可能な数十の文字が刻まれている。その右には、球技場の片一方の建物と、球技を見物しているらしい恐らくは五人の人物が描かれている。モニュメント16と同じく、豪華に着飾った、エリートと思しき人物たちである。ただ、モニュメント16とモニュメント19は、人物の表し方は類似しているが、文字の大きさが全く異なるので、別々に製作されたものであろう。文字

の大きさや刻まれ方から見ると、モニュメント16に酷似しているのはモニュメント2aである。ベラスケス・ガルシアが言うように、この両者はそれぞれかつて同一のモニュメントを構成していた一部であろう (Velásquez Garcia 2004: 97)。だとすると、97.0.0.0のカトゥン完了の儀式を行ったのは、ヤシュ・ヨパートであるということになる。

第二章第四節で述べたように、ユクヌーム・チェーン一世とヤシュ・ヨパートの間には、カルトゥーン・ヒシュと「空の証人」という少なくとも二人の王がいたことが知られている。この時間的差が、「捕虜グループ」と「エリートグループ」の建造時期の差に相応しているのかも知れない。

「エリートグループ」のモニュメントの製作時期を考える上で有用だと考えられるのが、ツイバンチェ・グループの建物VIと建物II、及びトゥテイルのT1とT2である。これらの建築物の軒蛇腹が、「エリートグループ」のブロックと大きさがほぼ同じであることから、建造年代も同じ頃と推測できるのである (Valda 2004: 32 註6)。これらの建物が初めて建てられたのは、古典期後期の初め頃と考えられているので、「エリートグループ」

のモニュメントが製作されたのもその頃であろう。このことは、碑文に刻まれた日付のうち、最古のものが五七三年、あるいは六〇二年であるという事実と符合する。

#### 第四節 「捕虜の建物」のブロック製作の諸事情

これまで「捕虜の建物」のブロックについて、それぞれ「捕虜グループ」と「エリートグループ」に分けて検討してきた。これによって、「捕虜グループ」のブロックと「エリートグループ」のブロックとは、大きさ、彫られた内容、製作時期のいずれも異なるが、カーン王にかかわるものであるという点では一致していることがわかった。ここでは、これまで述べてきたことから一体何が言えるのか、あるいは何が問題なのかを考察したい。

まず、「捕虜の建物」に再利用されたこれらの石のブロックが、どこから持ち去られたのかという問題である。現在ツイバンチェにあるからといって、必ずしも最初からここにあったとは限らないからである。しかし、このツイバンチェの石のブロックの場合は、恐らくもともとツイバンチェの建物の一部として利用されていたものであろう。一つには、これらが後世に再利用された際、敬

意を払うどころか何の意図も脈絡もなく、単なる建築資材として雑然と利用されているからである。先述したナランホの碑銘の階段一の例のように、他都市の建築あるいはその一部を移築する場合は、支配者の権威や権力の誇示などの政治的目的に利用するためであった。そのために、碑文が刻まれたモニュメントの場合は、刻まれた内容に利用できる価値があるからこそ、わざわざ遠路運んで新たに築造したのである (Tokovine 2007:15)。従って、ツイバンチェの例のように、彫られた光景や文字に何の顧慮も払わず、単なる建築資材として用いるのであれば、わざわざ遠隔地から運んでくる意味がないのである。もう一つの理由は、「エリートグループ」について述べた際に触れたように、これらのブロックがツイバンチェ・グループの建物VIと建物II、及びトゥテイルのT1とT2と同時期に製作されたと考えられるからである。同じ石材を使った建築物が複数現存していることから、これらのブロックがもともとツイバンチェで製作され、建築物の石材として利用されたとみて間違いないであろう。

次に、これらのブロックを最初に製作したのはどういった人たちであろうか。この点については、蛇頭紋章文

字の存在が鍵を握っていると思われる。モニュメント15の碑文に、蛇頭紋章文字の最古の生起例が見られることから、遅くともこの頃までにはカーン王朝が成立していたことは間違いない。第二章でも述べたが、四七一年ないし四八四年というのは、紋章文字の生起としてはマヤ地域の他国と比べても、かなり早い部類に属する。ティカルと共に、古典期マヤ社会の中枢を占めることになる「超大国」に相応しいと言えよう。「捕虜グループ」にしても「エリートグループ」にしても、これらのブロックが製作された時期のツイバンチェには、カーン王朝にかかわる人々が居住していたと考えられる。

ところが、「エリート・グループ」のモニュメントが製作されて間もなく、ツイバンチェの建築様式には変化が見られる。第二章でも述べたように、古典期前期の建築に一般的に見られた建築様式は、ペテン様式であった。それが古典期中頃を境に、突然廃れるのである (Zentgraf 2004:25)。この急激な変化は、単なる流行の変化というよりも、支配勢力の交替を窺わせる。たとえば、トゥテイルの二つの建物は、古典期後期が始まる頃に火災や破壊の痕跡が見られるなど、この勢力交替には戦争を想起させる暴力的な要素が伴っていたようなのである。

(Nalda y Balanzario 2006: 46)。

興味深いことに、ツイバンチエの建築様式に変化が生じる古典期後期の始め頃、初めて蛇頭紋章文字がカラクムルを表す文字と共に生起する (Schele and Freidel 1990: 176 Fig. 5: 7; Grube 2004 a: 117; Velásquez Garcia 2005: 2-3)。六四二年に建造されたナランホの階段一の第六段のテキストに言及した際に、蛇頭紋章文字がカラクムルの地名チーク・ナーブと初めて結びついて生起していることに触れた。これは、カーン王国の中心がカラクムル (チーク・ナーブ) であることを示す最古の史料であり、これ以前にカラクムルとカーン王国をつなぐ史料は何もない。つまり、ツイバンチエからカーン王国の建築様式 (ペテン様式) が消滅し、またいくつかの建築物が破壊される頃、カーン王朝の紋章文字が初めてカラクムルと結びついた形で現れるのである。

## 第五章 カーン王朝の変遷

前章までに、古典期前期のカーン王国を巡る問題について、カラクムルとツイバンチエの碑文史料を主として考察を進めてきたわけだが、以下のようなことが確認できた。

(一) 古典期前期に、ツイバンチエでは蛇頭紋章文字が生起するのに対し、カラクムルには欠如している。  
 (二) 古典期前期のカラクムルの石碑14には、同地の名であるチーク・ナーブという文字が生起しており、この地名は古典期を通じて他国でもカラクムルの地名として用いられている。

(三) 古典期前期のカラクムルの石碑43には、エル・ミラドル盆地に由来する権威にかかわっていると見られるチャタンという地名が、称号の一部として用いられている。

(四) ヤシュチラン、ナランホ、カラコル、ロス・アラクラネス、パレンケなどの遺跡の碑文から、古典期前期に蛇頭紋章文字を伴う数人の王が、マヤ低地南部で活発な対外活動を展開していたことが窺える。

(五) 恐らく最古のカーン王であるユクヌーム・チェーンの名が、五世紀後半の日付と共に、ツイバンチエのモニユメントに戦勝記念として言及されている。

(六) 蛇頭紋章文字がカラクムルと結びつくのは、七世紀初めである。

以上のことから、古典期前期に関しては、カーン王国の拠点はツイバンチエにあったと考えるのが妥当である。

現在判明している限りで最古のカーン王は、同地の碑文に名前が生起しているユクヌーム・チェーン一世であり、その治世は五世紀後半であった。続く数人の王の治世に、カーン王国は同地を中心に、低地南部において活発な対外活動を展開した。しかし、ナランホの碑銘の階段のテキストから判断して、遅くともユクヌーム「頭」王の治世である七世紀前半には、首都がカラクムルであったことは確かである。<sup>(28)</sup>

ユクヌーム「頭」王の治世に首都が移されたとする、それにはユクヌーム「頭」王に至るまでのカーン王国の対外関係がかかわっていると思われる。六世紀の後半には、カラコルと同盟関係を結んだカーン王国がティカルと戦いを繰り広げ、最終的には勝利を収めている。ティカルとの戦争を遂行するに当たっては、より近いカラクムルの方が戦略的に有利であろう。また、この時期はカーン王国がヤシユチランと関係を持ったり、パレンケを攻撃したりと、低地南部における対外活動を活発化させた時期でもある。このような活動を遂行する上で、低地南部のほとんど北端に位置するツイバンチェという場所が、不便になってきたのではなからうか。そのため、戦略的により優位な立地条件にあるカラクムルに、活動の

根拠を移したのかも知れない。また、マーティンが指摘しているように(Martin 2005: 11)、このような実利的な点だけでなく、カラクムルというティカルに匹敵する歴史と規模を持つ場所を首都にすることは、先古典期以来の伝統を誇るティカルを凌駕するようになったカーン王国にとって、それにふさわしい象徴的価値を獲得するという意味で重要だったと考えられる。ただ、考慮に入れておかねばならないのは、古典期後期が始まる頃にツイバンチェの建築物に破壊の痕跡が見られ、しかもこれを境に勢力交替が起こっていたと見られる点である。このことと、カーン王国が首都を移転させたと思われることがどのようにかかわっているのか、現時点では何とも言えない。

カーン王国の首都がツイバンチェからカラクムルに移ったとすると、それ以前にカラクムルすなわちチーク・ナーブを根拠地とし、ウシユテトウインを領有していたのはどのような国家だったのだろうか。そして新来のカーン王朝とその国家との関係は、どういふものだったのだろうか。カラクムルもツイバンチェと同じく、人々が居住を開始したのは先古典期中期にまで遡る。しかも、恐らく先古典期後期に巨大都市エル・ミラドールと密接

な関係があった。巨大な規模を誇る建物Ⅱが建設されていたことを考え併せても、カラクムルにはカーン王朝の痕跡が現われる以前に、かなり強力な支配体制が既に確立され、恐らくはエル・ミラドル盆地に由来する権威のもとに統治していたのであろう。<sup>(29)</sup>その後、古典期後期が始まる前後にカラクムルはカーン王国の首都になるのだが、以前と比べて大きな変化があったとは感じられない。蛇頭紋章文字が生起する以前は、文字史料が余りにも乏しいため、カーン王国の首都になる前と後の支配勢力の関係を確言することは困難であるが、敵対的なものではなかったように思われる。なぜなら、ツイバンチェを本拠地とするカーン王国が、武力でカラクムルに侵略した痕跡が見当たらないのである。また、建築様式や土器の観点から見て、カラクムルが最も強い結びつきを持っているのは、先古典期後期以来ずっとペテン地方であり、変化はな<sup>く</sup> (Braswell et al. 2004: 167-168)。更に、

建物Ⅱのように、古典期前期に建立された建築物を破壊することなく使用し続けるのに加えて、古典期前期の数少ないモニュメントである石碑14と石碑43を、わざわざ建物Ⅱに再設置したりもしている。<sup>(30)</sup>古典期前期に、ツイバンチェには蛇頭紋章文字、カラクムルにはチャタンヤ

チーク・ナーブというように、両者には国家の名称にかわる異なる文字が碑文に生起している。しかし、ユクヌーム「頭」がチーク・ナーブ出身のカーン王と表現されていることから見ても、これを排他的に考える必要はない。両遺跡とも古典期前期のテキストが非常に少ない現状では、カラクムルとツイバンチェが別々の国であったとも、あるいは同一王朝に属する都市であったと考えることも可能である。

## 第六章 おわりに

古典期は、低地南部マヤ社会の二つの「超大国」ティカル王国とカーン王国が、他国を巻き込んで覇権を争った時代であった。それだけに、カーン王国の勢力範囲がどれくらいのもので、その首都がどこにあったかという問題は、古典期マヤ社会の歴史を考える上できわめて重要である。本稿では、主としてカラクムルとツイバンチェの碑文史料に基いて、この問題にアプローチしてきた。低地南部マヤ地域には、数多くの都市遺跡が存在する。それらの規模は非常に多様であり、カラクムルやティカルのような大都市はむしろ例外的で、多数を占めるのは中規模ないし小規模の都市である。そのため、各都市が

独立国家の首都なのか、それとも二つあるいはそれ以上の複数の都市が単一の国家に属していたのか、判断するのが困難な場合がある。ドス・ピラスとアグアテカのように、近距離にある都市の場合は、同一国家にあったとしても納得しやすい。しかし、ティカルとドス・ピラスのように、距離が離れているにもかかわらず、同一の紋章文字を有していることが判明した当初、この事実が何を意味するのかわからなかった。結局この問題を解決したのは、新たな碑文の発見や解読の進展であった。カーン王国とツイバンチエ、カラクムルの関係の解明も、今後の新たな碑文史料の発見や解読が不可欠であろう。

いずれにせよ、カラクムルがカーン王国の中心になるのが明確なのは、古典期後期に入る頃からであり、それ以前にこの都市を本拠地にしていた国がどのような存在であり、またその国とカーン王国とがどのような関係にあったかは現在のところ明らかになっていない。従って、先古典期後期に台頭したカラクムルを首都とする王国が、古典期を通じて低地南部マヤ社会の一大強国としての強盛を誇ったように語られている現状は、きわめて不適切であると言わざるを得ない。<sup>31)</sup> 本稿では、蛇頭紋章文字を持つ国に対して「カーン王国」という仮称を用い、その

首都が最初はツイバンチエであり、後にカラクムルに移ったとの説に従った。しかし、古典期前期のカラクムルの支配勢力に関しては、カーン王朝と同一の勢力なのかあるいは全く別個の勢力なのか明確な判断を下すことができなかった。この問題については今後の検討課題としたい。

#### 註

(1) これに対し、ティカルの最大支配領域は一二六〇〇km<sup>2</sup>、総人口は一五〇万人であったと推定されている (Braswell et al. 2004 : 162-167-171 ; Folan et al. 1995 : 310 ; Folan et al. 2001 : 227)。

(2) ティカルはヤシユ・ムタル Yax Mutal、パレンケはラカムハ Lacumha というように、近年マヤの都市の本来の名称が判明しつつあるが、ツイバンチエは最近になって命名された名称である。ツイバンチエ・グループで発見された木製のリンテルの一つに、長期計算法で五五四年の日付が刻まれているものがあり、このリンテルにちなんで、遺跡全体が「木の文字」を意味するツイバンチエと名付けられたのである (Nalda 2004 : 15)。

(3) マヤ語で「白い道」を意味する道路。石と土で盛られ、表面を漆喰で舗装されていた。都市内の各地区をつなぐだけでなく、数十km離れた都市をつなぐ長大なものもあった。

- (4) ツィバンチエの規模の壮大さは遺跡自体の面積にとどまらず、建築物についても言える。ツィバンチエを調査した碑文学者のグルーベ Nikolai Grube は、個々の建築物の大きさがカラクムルに比肩しうると述べている (Velásquez García 2004: 102 註39)。
- (5) ペテン地方のティカル遺跡で典型的に見られる建築様式。ピラミッド状に聳える基壇の上部に、中央部に一か所の入口があり、天辺に屋根飾りが置かれた神殿が載っているのが特徴である。
- (6) 一九八〇年代以降、先ずフォラーン William Folan 率いるカンペチエ自治大学、続いてカラスコ Ramón Carasco Valgas が指揮するメキシコ国立人類学歴史学研究所が大々的な調査を実施している。
- (7) カラクムルの事例を表中に含めていないのは、マールカスガ同書を出版した当時、蛇頭紋章文字がまだ他の遺跡ではほとんど確認されておらず、従って参考にはならなからいからである。
- (8) ただし、古典期マヤ最大の国家であったティカルを例に取ると、紋章文字が出現していないからと言って、王国がまだ成立していなかったとは考えられない。なぜなら、ティカルで王権が確立したのは、紋章文字の出現よりかなり遡ると思われるからである。ティカルでは先古典期後期、紀元後一世紀までには世襲王権が確立していた可能性が指摘されている (Mohlby-Nagy 2003: 90-103)。これは初めて紋章文字が生起する約二〇〇年前のことである。このようにティカルの場合は、ここで考察しているカラクムルを除くと、王権成立の点でも紋章文字出現の点でも、他の古典期マヤの諸都市と比べると時期的に突出して早い。恐らく、王権が成立して以降、その王権が続べる政治体を示すものとして紋章文字が案出されたのであり、王国が成立してから紋章文字が出現するまで時間がかかったのも、ティカルがその先駆けだったからであろう。
- (9) 先古典期後期の北東ペテン地方のほとんどの大都市は、サクベでサクベとつながっていたが、とりわけエル・ミラドルとの間は多数のサクベで結ばれていた (Hansen 1998: 75)。
- (10) この称号の生起例はきわめて少なく、他には二つの事例しかない。一つはキリグアー Quigua にあり、同国王カック・ティリウ・チャン・ヨアト Kak' Tiliw Chan Yoat が八〇〇年に建立した石碑 1 に、七三六年の日付と共にワマウ・カウィール Wanaw Kawil の名が「チーク・ナーブのアハウ」として言及されている (Martin and Grube 2008: 114; Martin 2005: 10; Tunesi 2007: 15-16)。もう一つはカラクムルの建物 13 の残骸で見つかった碑文のブロックにあり、七五一年の日付と共にこの称号が生起している (Martin 2005: 10-11; Tunesi 2007: 16 註6)。いずれの例も、六九五年八月にカーン王ユクヌーム・イチャーク・カークがティカルのハサン・チャン・カウィール Jasaw Chan Kawil に敗れ、衰退期に入ってから以降のものである。
- (11) PSS と略して用いられる。マヤ文字テキストの中で、

最もよく見られる文字群である。きわめて定式化されたテキストで、もっぱら土器表面の口縁部の下、あるいは基底部の上に沿って帯状に描かれ、逆にモニュメントに刻まれることは滅多にない。PSSに引き続いて、土器の所有者の名前や称号が記される (Coe 1992: 224-225; 245-248-265; Coe and Stone 2001: 99-103)。

(12) ナクベ以外に、エル・ミラドール、ラ・ムエルタ La Muerta、サカタル Zacatal、ポルベニール Povonir、パカヤ Pacaya、ティンタル Tintal、ラ・ムラーリヤ La Muralla など出土しているが、いずれも土器の化学成分は異なること (Grube 2004a: 124)。

(13) 截形ピラミッド型の基壇上で、中央の大神殿の前に二つの小神殿が向き合い、全体で三角形を構成するように配置されたもの。

(14) 太陽の周期を観測するために建設されたと考えられている建築複合。

(15) ホトゥンとは、カトゥンの四分の一の期間のことである。本文でしばしば引用しているが、古典期マヤ社会では長期計算法と呼ばれる暦が用いられ、とりわけ石造モニュメントに刻まれた。これは紀元前三一一年九月八日を起点とする一種の絶対暦で、一日に相当するキン Kin を最小として、ウィナル winal (20キン)、トゥン tun (18ウィナル)、カトゥン (20トゥン)、バトゥン bak'tun (20カトゥン) の単位で構成されていた。中でもとりわけカトゥンの期間の完了は重要視され、しばしば王によって石碑などの記念のモニュメントが建立されたりしたの

だが、キリゲアーやピエドラス・ネグラス Piedras Negras のような少数の都市では、ホトゥン完了が祝われた (Sharer 2006: 754)。

(16) カロームテ Kaloomte とは、ティカルやカーンのような、数カ国に支配を及ぼすような強大な権力を持つ国の王のみが称することができた称号である。

(17) ウシユテトゥーンがカラクムルを含む広い領域の名称だと考えると、カラクムルの近郊にあるオシユペムル Ox-pemul の碑文で、同地の王が「ウシユテトゥーンのおシユペムル王」として言及されているのも得心がいく (Sprajc 2007: 79; Tokovine 2007: 21)。この場合、オシユペムル王がウシユテトゥーンという領域に対する支配権を主張していると解釈できる。

(18) なお、ペテン様式の建築技法は、トゥティル地区を除く三つの地区の初期の建物に明瞭に見い出せる。

(19) このような例は、他にも見られる。たとえば、ナランホの碑銘の階段一は、元々はカラコルで建造されたと考えられている。カラコルを打ち破ったナランホが、一種の戦利品としてそれを持ち帰り、七世紀のある時期に、建物18が見られる規模に増築された際に取り付けられたようなのである (Martin and Grube 2008: 73-95; Tokovine 2007: 15)。

(20) 各ブロックはモニュメントと命名され、2から22までの数字が付されている。このうち、モニュメント2、モニュメント7とモニュメント8の三つは、更にaとbの二つに分けられており、モニュメント10はa、b、cの

三つに分けられている。

- (21) 興味深いことに、捕虜の名はテキストの中だけでなく、捕虜のベルトの背中あたりにぶら下がっている頭の形状をした飾りでも表わされている。従って、テキストの文字が磨滅していても、名前がわかる例もある。たとえば、モニュメント5の捕虜の名はシヨーク・ウチャ Yook Ucha、モニュメント17の捕虜はシヨーク・モ Xook Mo、モニュメント21の捕虜はカック・モ Kak Mo'である。
- (22) ナルダは、この「オチ・チェン」という句について、別の解釈も提示している。彼によると、穴は地下世界への入り口とも考えられているので、「穴に入る」という表現は、死ぬべき運命にあった捕虜が、死後地下世界へと入って行くことを表しているというのである (Nalda 2004: 29)。しかし、石碑にしてもリントルにしても、およそマヤ地域のモニュメントは、支配者が自らの権威や権力を視覚的に顕示あるいは正当化するために建てられたものである。従って、敗者の地下世界への旅をわざわざモニュメントで表現したとは考えられない。
- (23) 本稿のツイバンチェの碑文の訳は、ベラスケス・ガルシアによるスペイン語訳 (Velásquez Garcia 2004: 87-102) に依拠している。
- (24) 判読できるのは、バーラム Bahlam とユクヌーム・チエーン の文字だけである。捕虜の肖像もほとんど残っていない。
- (25) GIII は、いわゆる「パレンケ三神」の一柱である。
- (26) モニュメント22には、同日に別の捕虜が捕らえられたことが記されている。
- (27) ユクヌーム・チェーン一世の名はこのツイバンチェのブロックにしか生起していないため、詳細な経歴はおろか生没年さえも不詳である。従って、この戦勝記念のモニュメントで事績が顕彰されているのは、ユクヌーム・チェーン一世も含めて、複数の王であることを否定することもできない。
- (28) そのことを示唆するものとして、カラクムルの石碑15と石碑8のテキストが挙げられる。このテキストからは、ユクヌーム・チェーン二世がカラクムルを拠点とする王朝の創始者と考えられていたことが窺える (Martin 205: 8)。ユクヌーム・チェーンというのは、恐らく最古の實在するカーン王であり、王朝の創始者である可能性が高いと思われるユクヌーム・チェーン一世と同名である。ユクヌーム・チェーン二世が即位に際してこの王名を採用したことは、自分が新しい都が始まる王朝の創始者であることを誇示しようとする意図が込められているのかも知れない。これは、ユクヌーム・チェーン二世の治世で王朝に断裂があったことを意味しない。と言うのも、六五七年にユクヌーム・チェーン二世が建立した石碑33に、「渦巻き蛇」王の即位や、彼が980.0.0 (五九三年八月二日) にカトゥン完了の儀式を行ったことが記されているからである (Martin 2000: 43, 2005: 7; Martin and Grube 2008: 105-106)。このことから、ユクヌーム・チエーン二世が「渦巻き蛇」王と同一の王統に属していたことが推測される。「渦巻き蛇」王に関しては、彼こそが

遷都の実行者であるとの説もある (Velásquez Garcia 2004:102)。

(29) たゞせば、エル・ミラドールが先古典期後期末に何らかの原因で放棄された後、支配勢力が新たな本拠地として移り住んだのがカラクムルだったのかも知れない。

(30) カラクムルには、カーン王国以前にコウモリの頭を紋章文字に持つ国家が存在していたとの説がある (Martin 2005:5-15; Tokovinine 2007:15-22)。この説によれば、カーン王国に首都を奪われた「コウモリ王国」は、カーン王国が衰退した八世紀前半に再びカラクムルを奪回した。カラクムルの建物IIに古典期前期の「コウモリ王国」時代に建立された石碑が再設置されたのは、そのせいだといわれている。この「コウモリ紋章文字」は、カラクムル以外にも、オンジュムル、ナーチトゥン Naachtun、ウシュル Uxul、バラクバルなどかなりの範囲にわたっている (Grube 2005:97-100)。この問題については、稿を改めて検討してみたい。

(31) 近年、この状況にも徐々に変化が見られつつあり、蛇頭紋章文字を持つ国家の首都が、当初はツイパンチエであったのが、後にカラクムルに移ったとの説が、次第に容認されつつある (Freidel, David A., Hector L. Escobedo and Stanley P. Guenter 2007:187-208; Hansen, Richard D., Wayne K. Howell and Stanley P. Guenter 2008:25-64; Martin and Grube 2008)。また、昨年発表されたタラス美術館所蔵の祭壇に関する論文や、今年発表されたポル・ボックス Pol Box 遺跡に関する論文では、蛇頭紋章

文字を持つ国家を特定の遺跡と結びつけようとなく、「蛇王国 Snake Kingdom」あるいはカーンの名称を通じて (Martin 2008; Esparza Olguin and Perez Gutiérrez 2009)。

#### 引用文献

- Barrera Vasquez, Alfredo  
1995 *Diccionario Maya: Maya-Español Español-Maya*. Editorial Porrúa, S. A., México, D. F.  
Berlin, Heinrich  
1958 El glifo "emblemata" en las inscripciones mayas. *Journal de la Société des Américanistes* 47: 111-119.  
Braswell, Geoffrey E.  
2003 Introduction: Reinterpreting Early Classic Interaction. In *The Maya and Teotihuacan: Reinterpreting Early Classic Interaction* (Braswell, Geoffrey E., ed.): 1-43. University of Texas Press, Austin.  
Braswell, Geoffrey E., Joel D. Gunn, María del Rosario Dominguez Carrasco, William J. Folan, Laraine A. Fletcher, Abel Morales López, and Michael D. Glascock  
2004 Defining the Terminal Classic at Calakmul, Campeche. In *The Terminal Classic in the Maya Lowlands: Collapse, Transition, and Transformation* (Demarest, Arthur A., Prudence M. Rice, and Don S. Rice, eds.): 162-194. University Press of Colorado, Boulder.  
Carrasco Valgas, Ramón

- 1998 'The Metropolis of Calakmul, Campeche.' In *Maya* (Schmidt, Peter, Mercedes de la Garza and Enrique Nalda, eds.) : 372-385. Rizzoli International Publications, Inc., New York.
- Carrasco Valgas, Ramón  
 2000 El cuchucabal de la Cabeza de Serpiente. *Arqueología Mexicana* 42 : 12-19.
- Carrasco Valgas, Ramón, Sylviane Boucher, Paula Alvarez González, Vera Tiesler Blos, Valeria García Vierna, Renata García Moreno, and Javier Vázquez Negrete  
 1999 New Evidence on Jaguar Paw, a Ruler from Calakmul. *Latin American Antiquity* 10(1) : 47-58.
- Carrasco Valgas, Ramón y Marínés Colón González  
 2005 El reino de Kaan y la antigua ciudad maya de Calakmul. *Arqueología Mexicana* 75 : 40-47.
- Coe, Michael D.  
 1992 *Breaking the Maya Code*. Thames and Hudson Inc, New York.
- Coe, Michael D. and Mark Van Stone  
 2001 *Reading the Maya Glyphs*. Thames and Hudson Ltd, London.
- Demarest, Arthur A. and Antonia E. Foias  
 1993 Mesosamerican Horizons and the Cultural Transformations of Maya Civilization. In *Latin American Horizons* (Rice, Don Stephen, ed.) : 147-191. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D. C.
- Esparza Olguin, Octavio Q. and Vanía E. Pérez Gutiérrez  
 2009 Archaeological and Epigraphic Studies in Pol Box, Quintana Roo. *The PARI Journal* 9(3) : 1-16.
- Folan, William J., Joyce Marcus, Sophia Pincemin, María del Rosario Domínguez Carrasco, Laraine Fletcher, and Abel Morales López  
 1995 Calakmul : New Data from an Ancient Maya Capital in Campeche, Mexico. *Latin American Antiquity* 6(4) : 310-334.
- Folan, William J., Joel D. Gunn, María del Rosario Domínguez Carrasco  
 2001 'Triadic Temples, Central Plazas and Dynastic Palaces : A Diachronic Analysis of the Royal Court Complex, Calakmul, Campeche, Mexico.' In *Royal Courts of the Ancient Maya, Volume Two : Data and Case Studies* (Inomata, Takeshi and Stephen D. Houston, eds.) : 223-265. Westview Press, Boulder.
- Freidel, David A., Hector L. Escobedo and Stanley P. Guenter  
 2007 A Crossroads of Conquerors : Waka' and Gordon Willey's "Rehearsal for the Collapse" Hypothesis. In *Gordon R. Willey and American Archaeology* (Sabloff, Jeremy A. and William F. Fash, eds.) : 187-208. University of Oklahoma Press, Norman.
- Graham, Ian  
 1978 *Corpus of Maya Hieroglyphic Inscriptions, Volume 2, Part 2*. Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University, Cambridge.

- Grube, Nikolai  
 2003 Appendix 2 Epigraphic Analysis of Altar de los Reyes. In *Archaeological Reconnaissance in Southern Campeche, Mexico : 2002 Field Season Report* (ed. Šprajc, Ivan). Foundation for the Advancement of Mesoamerican Studies, Inc. <http://www.famsi.org/reports/01014/section05.htm>
- Grube, Nikolai  
 2004a El origen de la dinastía Kaan. In *Los Cautivos de Dzibanché* (Nalda, Enrique, ed.) : 117-131. Instituto Nacional de Antropología e Historia, México, D. F.
- Grube, Nikolai  
 2004b Ciudades perdidas mayas. *Arqueología Mexicana* 67 : 32-37.
- Grube, Nikolai  
 2005 Toponyms, Emblem Glyphs, and the Political Geography of Southern Campeche. *Anthropological Notebooks* 11 : 89-102.
- Guenter, Stanley  
 A Reading of the Cancuen Looted Panel. <http://www.mesoweb.com/features/cancuen/Panel.pdf>
- Hansen, Richard D.  
 1998 Continuity and Disjunction : The Pre-Classic Antecedents of Classic Maya Architecture. In *Function and Meaning in Classic Maya Architecture* (Houston, Stephen D., ed.) : 49-122. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D. C.
- Hansen, Richard D., Wayne K. Howell and Stanley P. Guenter  
 2008 Forgotten Structures, Haunted Houses, and Occupied Hearts : Ancient Perspectives and Contemporary Interpretations of Abandoned Sites and Buildings in the Mirador Basin, Guatemala. In *Ruins of the Past : The Use and Perception of Abandoned Structures in the Maya Lowlands* (Stanton, Travis W. and Aline Magnoni, eds.) : 25-64 University Press of Colorado, Boulder.
- Harrison, Peter D.  
 1999 *The Lords of Tikal : Rulers of an Ancient Maya City*. Thames and Hudson Ltd, London.
- Marcus, Joyce  
 1976 *Emblem and State in the Classic Maya Lowlands : An Epigraphic Approach to Territorial Organization*. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D. C.
- Marcus, Joyce  
 2003 The Maya and Teotihuacan. In *The Maya and Teotihuacan : Reinterpreting Early Classic Interaction* (Braswell, Geoffrey E., ed.) : 337-356. University of Texas Press, Austin.
- Martin, Simon  
 2000 Los señores de Calakmul. *Arqueología Mexicana* 42 : 40-45.
- Martin, Simon  
 2004 Preguntas epigráficas acerca de los escalones de Dzibanché. In *Los Cautivos de Dzibanché* (Nalda, Enrique, ed.) : 105-115. Instituto Nacional de Antropología e Historia,

- México, D. F.
- Martin, Simon
- 2005 Of Snakes and Bats : Shifting Identities at Calakmul. *The PARI Journal* 6(2) : 5-15.
- Martin, Simon and Nikolai Grube
- 2000 *Chronicle of the Maya Kings and Queens : Deciphering the Dynasties of the Ancient Maya*. Thames and Hudson Ltd, London.
- Martin, Simon and Nikolai Grube
- 2008 *Chronicle of the Maya Kings and Queens : Deciphering the Dynasties of the Ancient Maya, Second Edition*. Thames and Hudson Ltd, London.
- Mathews, Peter, Kathryn Reese-Taylor, Marcelo Zamora y Alexander Pannington
- 2005 Los monumentos de Naachtun, Petén. En *XVIII Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala, 2004* (Laporte, J. P., B. Arroyo y H. Mejía, eds.) : 669-672. Museo Nacional de Arqueología y Etnología, Guatemala.
- Michel, Genevieve
- 1989 *The Rulers of Tikal*. Publicaciones Vista, Guatemala, C. A.
- Moholy-Nagy, Hatula
- 2003 Beyond the Catalog : The Chronology and Contexts of Tikal Artifacts. In *Tikal : Dynasties, Foreigners, & Affairs of State* (Sabloff, Jeremy A., ed.) : 83-110. School of American Research Advanced Seminar Series, School of American Research Press, Santa Fe.
- Nalda, Enrique
- 2004 Dzibanché : el contexto de los cautivos. In *Los Cautivos de Dzibanché* (Nalda, Enrique, ed.) : 13-55. Instituto Nacional de Antropología e Historia, México, D. F.
- Nalda, Enrique, y Sandra Balanzario
- 2006 Kohnulich y Dzibanché : los últimos años de investigación. *Arqueología Mexicana* 76 : 42-47.
- Pincemin, Sophia, Joyce Marcus, Lynda Florey Folan, William J. Folan, María del Rosario Domínguez Carrasco and Abel Morales López
- 1998 Extending the Calakmul Dynasty Back in Time : A New Sela from a Maya Capital in Campeche, Mexico. *Latin American Antiquity* 9(4) : 310-327.
- Schele, Linda and David Freidel
- 1990 *A Forest of Kings : The Untold Story of the Ancient Maya*. William Morrow and Company, New York.
- Sharer, Robert J. with Loa P. Traxler
- 2006 *The Ancient Maya, Sixth Edition*. Stanford University Press, Stanford.
- Stuart, David and George Stuart
- 2008 *Palenque : Eternal City of the Maya*. Thames and Hudson Ltd., London.
- Šprajc, Ivan
- 2007 Exploraciones recientes en el sureste de Campeche. *Arqueología Mexicana* 86 : 74-80.
- Tokovinine, Alexandre

- 2007 Of Snake Kings and Cannibals : A Fresh Look at the Naranja Hieroglyphic Stairway. *The PARI Journal* 7 (4) : 15-22.
- Tunesi, Raphael
- 2007 A New Monument Mentioning Wanaaw K'awil of Cahalmul. *The PARI Journal* 8 (2) : 13-19.
- Velasquez Garcia, Erik
- 2004 Los escalones jeroglíficos de Dzibanché. In *Los Cautivos de Dzibanché* (Nalda, Enrique, ed.) : 79-103. Instituto Nacional de Antropología e Historia, México, D. F.
- Velásquez García, Erik
- 2005 The Captives of Dzibanché. *The PARI Journal* 6 (2) : 1-4.
- Wren, Linnea, Travis Nygard, and Ruth Krochock
- Monuments of Yo'okop. In *Final Report of The Selz Foundation's Proyecto Arqueológico Yo'okop 2001Field Season : Excavations and Continued Mapping* (Shaw, Justine M., ed.) : 80-104. College of the Redwoods, Eureka. [http://online.redwoods.cc.ca.us/yookop/Yok\\_2001\\_report\\_text&figs.pdf](http://online.redwoods.cc.ca.us/yookop/Yok_2001_report_text&figs.pdf)